

心身機能が低下しても 持てる能力を生かして社会参加する方法とは

(企画・協力：(一社)シニア社会学会)

提言

地域と「働く」「働きつづける」

多様なタネをまこう！

- ・働くことで自立といきがいが生み出される。
- ・共に働くことでつむぐ共生。
- ・地域に新たな力が増えていく。

これが『新たな共生社会』の姿!!

登壇者

- 【進行役】 澤岡 詩野氏 (公財)ダイヤ高齢社会研究財団主任研究員
- 【アドバイザー】 袖井 孝子氏 (一社)シニア社会学会会長、お茶の水女子大学名誉教授
- 前田 隆行氏 DAYS BLG!代表
- 斎藤 縣三氏 (特非) わっぱの会理事長
- 渥美 京子氏 (一社) コミュニティネットワーク協会理事長

■ 寄せられた声から

- 発表者3人の方の、勇気ある種まきと地域に密着した長く地道な活動に感動しました。不足を嘆くのではなく、自分から種をまき、地域の方々の協力を得ながら育てることの大事さを知りました。
- それぞれが共生社会で生きていくための取り組みを拡大していかれた背景などがよく理解できました。住民全体を巻き込みながら、みんなのやりたいこと、自立への手助け…。本当にとっても大切なことに取り組まれていて頭が下がります。少しでも参考にさせていただいて、自分たちのところでやってみたいと思います。
- 水平な関係を保つことは、支援を進めていく中で大切だと感じました。自分たちが社会に必要とされているという言葉が心に響きました。

議事要旨 澤岡 詩野氏

昨年度の神奈川サミット（分科会27）では、「心身機能が低下しても少しの支えがあればできることはたくさんある。支えられながらも誰かを支えられることで、生きがいをもって自立した暮らしを営むことは可能だ。」という提言を行った。

提言を社会に実装させていく『ジャンプ』の本年度は、生きがいと社会的に自立することを実現する手段の一つとして「就労」や「働くこと」にも着目し、認知症になった人や生活困窮に陥った人、障がいのある人にとっての意味、地域コミュニティに及ぼす効果、それを支える仕組みの在り方を事例から模索した。

前田隆行氏：東京都町田市で、認知症高齢者が就労して謝礼を得ることができるデイサービスを運営している。洗車やミニコミ誌のポスティングなどの就労は個々の「出来ること」や「やりたいこと」を分けあう形で成立しており、そうして培われた仲間との関係性が、受け入れられている感覚や必要とされている感覚、生きがいや満足感を高めている。

渥美京子氏：都内で空き家率の最も高い豊島区において「空き家を活用したとしま福祉支援プロジェクト」に取り組み、住宅確保要配慮者向けのセーフティネット住宅や多世代・多文化の共生型交流拠点を整備している。この運営に住宅の居住者や障がいのある人が仕事として関

わることで、孤立と貧困を解決するだけでなく、「社会に貢献する存在」として生きることを可能にしている。

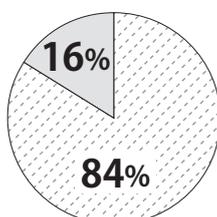
斎藤縣三氏：「どんな障がいがあっても、誰もが参加できる」仕事づくりの場としてパン屋を開設し、近年では愛知県名古屋市の大曾根にある団地の中で、障がいのある人や地域の高齢住民が働くカフェやリサイクルセンターなどからなる地域総合交流拠点の運営も行っている。この場で働くことを通じ、障がいのある人の経済的な自立や生きがいが生み出されるだけではなく、相互理解が進み、共に地域を創るパートナーとなりつつある。

アドバイザー：本分科会では、課題を抱える人が地域コミュニティで働くことを通じて本人のウェルビーイング向上のみならず、地域が共生社会へと変貌していく可能性を明らかにした。社会参加の方法の一つとして「就労」のもつ可能性は大きいですが、同時に、これを個人や一つの団体で形にすることには大きな壁があり、社会全体で取り組むことが重要である。

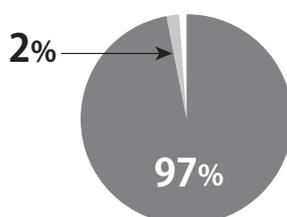
進行役：登壇いただいた三者は、経済的な側面のみならず「社会参加」や「ウェルビーイング」を実現する方法の一つとして「地域と働く場」を創り出してきたパイオニアといえる。まずは分科会に参加した個々が、それぞれの状況に応じた小さな一歩を展開していくことが求められている。

アンケートの結果 参加者概数：277名 回答者数：102名

回答者の所属先



助け合い活動をすすめる立場の方



その他の方

